

まほろば宮下社長のルーツ案内記

その4

会津から
後進へ

福島復興から日本の立て直し探訪

旅の案内人：神奈川県在住

大橋 しのぶ



前回までのあらすじ

二〇一五年五月、まほろばの宮下社長と母方の先祖が同じ福島県・会津若松である事が分かり、ルーツ探しのお手伝いをする事になりました。

七月、福島県二本松市で講演会をするという奥様の日程に合わせて会津をご案内する事になり、まず初日は倉田本家の跡地にあるイタリアンレストラン・ルーチエ、二日目は田中稻荷・鈴木屋利兵衛・興善寺・甲賀町口城門跡などをご案内しました☆☆☆



甲賀町郭門（大手門）跡

甲賀町通りの悲喜いもいも

甲賀町口門跡を後にして、そのまますすぐ甲賀町通りを北上すること数分、「甲賀町五番地」が宮下社長の御祖母様である秀子さんの出生地です。そこは現在、「星白清堂」という化粧品やジュエリー・ファッション小物を扱う素敵なお店になっていました。ちなみに宮下社長と宮下社長のお父様は、この御祖母様と同じ名前である往年の女優優・高峰秀子さんの大ファンだそうです！（倭詩七六頁）。名前がきつかけのご最良のようですが、そういうことって結構ありますよね（笑）

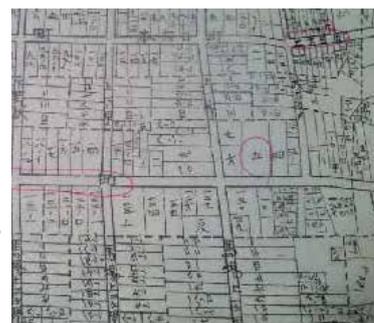
やがて曾祖父の蔵田（倉田）喜一郎さんが、愛娘の秀子さんをその腕に抱いて北海道へ飛び立つことになりました。まだ秀子さんが一歳半の時のことでした。



この甲賀町通りは鶴ヶ城の大手門から北にま

つすぐ伸び、甲賀町口郭門（大手門口）を出ると町方の通りとなります。町から郊外に出ると白虎隊自刃の地である飯盛山の脇を通り滝沢峠を越え、やがて二本松街道や白川街道に繋がります。ついには江戸にまで至る大手通りです。その為、この甲賀町通りは江戸時代には参勤交代の通り道として使われ大いに賑わいました。

戊辰戦争時には会津藩主・松平容保公と白虎隊士もこの道を通り出陣しました。会津藩士や白虎隊士の奮戦もむなしくやがて西軍は母成峠・戸ノ口原を突破し滝沢峠を越え、この道を通り、甲賀町口郭門をはじめとする北口郭門から郭内になだれ込み鶴ヶ城に迫りました。



敵の侵入を告げる半鐘が鳴り響くと、藩士やその家族の多くは、あらかじめ決められていた指示通りに鶴ヶ城に駆け込みました。この時の混乱で、お城に入れなかった娘子隊（じょうしたい）の戦死

や白虎隊士自刃、城下町では籠城して迷惑かかる事を厭う病人や老人、そして家老の西郷頼母（たのも）一族二十一名の壮絶な集団自刃などの悲劇が起りました。

西郷頼母は会津藩の筆頭家老で、その屋敷は鶴ヶ城の大手門の



甲賀町口郭門に入る参勤交代の列

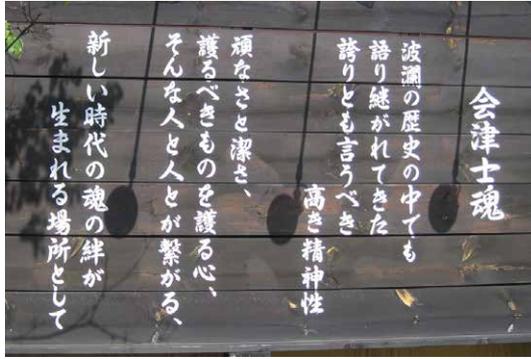
前、甲賀町通りと本一之丁が交差するところにありました。この時、西郷頼母の妻、千重子は三四歳。会津婦道の精神を伝える、下記の有名な辞世の歌を残しています。

くなよ竹の 風にまかする
身ながらも たわまぬ節は

ありとこそきけ

意味「なよ竹と同じような弱い女である我が身だけれど、強風にも曲げられない竹の節のように節義に殉じてみせる」

藩祖・保科正之以来、勤皇の精神を高く持ち、現藩主の松平容保は孝明天皇の信任厚く、困難であった京都守護職を引き受け、全藩をあげて皇室に忠節を尽くした。会津藩が、逆賊の汚名を着せられた無念の思い、しかし天地神明にかけて仁義をつらぬくのだ、という誇り高い精神が、この「なよ竹の歌」を始めとする多くの会津人



旧・倉田喜一郎さん宅付近で見つけた看板です

の辞世の歌にあらわれています。

西軍はお城の東南約一・五キロにある小田山に当時最新と言われたアームストロング砲を据え、最高で一日に二千発以上もの砲弾を鶴ヶ城に撃ち込みました。城内は死傷者で溢れ埋葬しきれなくなった死体は井戸へと投げ込まれました。

大河ドラマ「八重の桜」の主人

公であり、幕末のジャンヌ・ダルクと言われた山本八重さんも、女の身でありながら男装し、最新式の銃を使いこなし、お城に迫る西軍に果敢に応戦しました。しかし約一か月の籠城戦の末、会津藩はついに降伏します。

の布地さえ包帯に使えば無くなっています。女達は包帯の血に染まっていない白い部分をかき集め、無念の涙を流しながら小さな端切れを縫い合わせ、何とか一

枚の白旗をこしらえたそうです。

降伏の調印式は、鶴ヶ城大手門前の甲賀町通りの路上で執り行われました。式場には十五尺(四・五メートル)四方の緋毛氈(赤じゅうたん・今でいうフェルト)が敷かれ、最後の会津藩主となった松平容保は降伏文書に調印しました。

会津藩士たちは、逆賊の汚名を着せられたこの日の無念と屈辱を忘れぬよう、緋毛氈を小さく切り刻んで懐中深く持ち帰り、それは後に泣血氈(きゅうけつせん)と呼ばれるようになります。

この場所は現在「会津酒造歴史館」になっており、館内にある「会津名宝館」には泣血氈の実物が展示されているそうです。

錦絵ではお城は綺麗に描かれていますが、一か月に渡る籠城戦で大量の砲弾を浴びたお城はボロボロになっていました。し



かし会津藩士やその子女達はそれに耐え、降伏するまで、ついに一歩も西軍をお城に踏み込ませる事はありませんでした。

山本八重さんは開城の前夜、三の丸雑物庫の壁に月明かりを頼りにかざしで下記の和歌を刻みました。

明日の夜は何国の誰か
ながむらむ慣れし

お城に残す月影

慣れ親しんだ鶴ヶ城を、命をかけて守ったこのお城を、逆賊の汚名の下に明日は明け渡さなければならぬ、無念の開城前夜の、それでも天空



の月を仰ぎ見る、悲しくも美しい響きの歌です。

現在の甲賀町通り（町方）は閑散としていて、車も一方通行のただの狭い通りしか見えませんが、かつては参勤交代のお殿様や白虎隊士達、そして宮下社長のご先祖様が行き来したのです。まさに道に歴史ありですね。

斗南への道

落城後、約一七〇〇人の会津藩士達は猪苗代や塩川村、東京などに分散され謹慎処分となります。翌・明治二年、旧家老の萱野権兵衛が戦争責任を一身にかぶり切腹処分となり、それで面目を保てた明治政府は次第に態度を軟化さ

せ、会津藩は再興を許される事になりました。

新たな藩の名前は「斗南藩」場所は陸奥国の北（現・青森県下北半島・十和田湖近辺）と、蝦夷地の西南（現・北海道の瀬棚近辺）に分散して三万石と決まりました。

三万石と言っても実際は七千石と言われる不毛の地であり、会津藩の表高二十三万石（実質は三〇万石と言われる）に比べるとかなり極端な減俸である事が分かります。

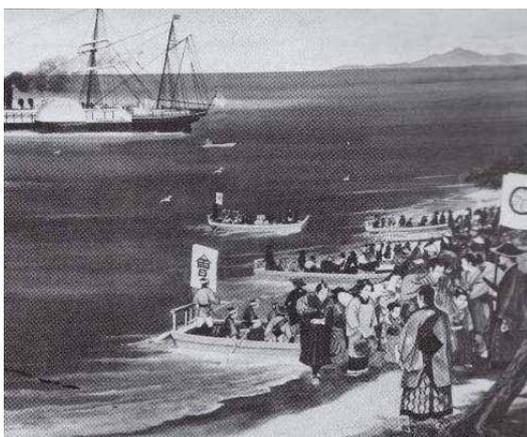
斗南藩が、青森・北海道と津軽海峡を隔ててかなり距離のある土地に分散されての立藩となったのは明治政府の都合でもありません。新政府は蝦夷地の開拓を推し進める為に、謹慎中の会津人に目をつけたのです。会津人は優秀で勤勉な人材であり、また蝦夷地の開発は敗者を体よく処分できる恰好の方法でもありました。

明治二年、斗南藩の再興が許されると新政府の兵部省は、さっそく東京に謹慎していた会津人から四四四人を選び、第一陣として品



川港からアメリカ船ヤンシー号に乗せ小樽港へと運びました。やがて第二陣の九〇数世帯が追加され、小樽の会津人は倍に増えました。彼らはその後しばらく小樽に据え置かれ、紆余曲折の末、余市へ入植する事が決まります。余市は小樽から約二四キロ西にある寒村で、彼らは小樽から新天地である余市まで徒歩で出立したのでした。

最終的に北海道に渡った会津人の戸口は二二〇戸、七百余人であったらしいですが、明治四年の廃藩置県以降、青森県に開拓団の募集が何度かあ

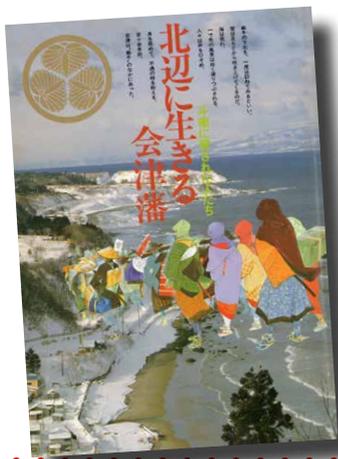


り、その募集で札幌の琴似や函館へも入植している会津人もいるので、その人数も加えるともっと多くの会津人が北海道に渡っている事になります。ちなみに私の親族の山田道守も明治九年開拓団の一員として下北半島から函館に渡り、その地で若くして死亡しています。

斗南藩の本拠地である下北半島への移住は明治三年の春から始まりました。旧・会津藩士とその家族達は東京・猪苗代・高田の各謹慎所からそれぞれ陸路・海路を辿って新領地を目指しました。海道を辿った者は船酔いに苦しみなながらも短期間の旅だったのですが、陸路をたどった者達はかなり悲惨な旅路だったそうです。宿泊に難色を示す宿も多く、折り悪く前年・明治二年が凶作だった為、ようやく泊まれた宿でも粥をすす

のが手一杯でした。みぞれまじりの寒さの中、この過酷な旅で斗南藩まで辿り着けず亡くなった者も多人数にのぼりました。

私の四代前のご先祖様も当時まだ一〇歳でしたが、腰に刀を差して下北半島まで歩いて落ち延びて行ったと言いつづけています。ただ私は、ずっと長い間、それは先祖の一家族だけが、たまたま青森まで落ち延びたのだと思っていました。しかし十一年前に初めて会津若松に行き、会津武家屋敷で、「北辺に生きる会津藩（斗南に移された人たち）」という本を手にして、これが挙藩流罪ともいってき藩を挙げての大移住だったと知ってかなりの衝撃を受けたのでした。



厳寒の下北を、一度は訪ねてみるといい。

雪は足もとから吹き上げてくるのだ。

海は荒れ、一寸先の風景は白く塗りつぶされる。

人々は声をひそめ、身を屈めて、不遇の時を耐える。

百十余年前、会津は「厳寒」のなかにあった。

『北辺に生きる会津藩』より

人生を変えた一冊と言えます。

会津藩と天文学

ところで斗南とみなみとはちよつと聞きなれない単語で、藩の名前としても異色の響きがあると思います。

一番有力の説としては中国詩文中にある「北斗以南皆帝州」から取ったと言われています。「北の

辺境に流されてきたが、ここも天皇の国である。我々は朝敵でもなければ賊軍でもない、共に北斗七星を仰ぐ帝州の民であるである。」

という思いを込めて付けたと言われています。

今一つの説は、「南斗六星」を

語源とするものです。南斗六星とは北斗七星に対してつけられた星座の呼称であり、中国古代の星座名を「斗宿」、和名を「ひつぎぼし」と言い、射手座の中央部を指します。

この星座をよく見ると、射手座が矢を隣のさそり座に向けているようなのです。もちろんさそり座は薩長藩閥政府を、射手は会津を象徴しており、当時の会津人の心境にびつたりだったと言われています。

きつとどちらの説も当たっていると思えますし、更に「いつか南にある墳墓の地・会津へと帰るのだ」という願いも込められていたのではないのでしょうか。

会津藩は藩祖・保科正之の時代から天文学が盛んでした。そして天文学と「暦（カレンダー）」の作成は切っても切れない関係にあります。保科正之は、碓石方であり数学者でもあった渋川春海に新たな暦作りを命じます。当時、朝廷が発行していた宣明暦は八百年以上使う内に少しずつ誤差

が蓄積して二日分もずれが生じてしまっていたのです。渋川春海は様々な困難の末、新たな暦を完成させました。

このエピソードは二〇〇九年、冲方丁により「天地明察」という小説になり、二〇一二年には映画化もされています。人生をかけ、ひたむきに数学や星空に向き合う人々が多数登場して読み応えのある物語です。

会津藩では、お城の側にあつた藩校・日新館で生徒に天文学を教え、天文台がありました。天文台まで備わっている藩校というのは全国でもかなり珍しかったそうです。

これほど天文学に通じていた会津藩士達です、新たな藩の名前として北斗七星や南斗六星にちなんだものを採用したというのとはとても納得できる事なのです。そんなご先祖様達の影響があるのか分かりませんが、私も小さい時から星空を眺めたり宇宙の事を考えるの



今一つの説は、「南斗六星」を

が大好きです。ちなみに現・国立天文台の副台長である天文学者・渡部潤一氏も会津人で、最近はテレビでも宇宙番組のコメンテーターとして大活躍されています。

斗南に残った人々

そんな志のもとに再興された斗南藩でしたが、下北半島は作物が育ちにくい極寒の地で、最初の冬から多くの藩士とその家族達が飢えと寒さで次々と亡くなっていました。そして二年後の廢藩置県の後は、多くの藩士達が会津や東京、北海道など全国各地に散っていくことになりました。

私のご先祖の石井家・樋口家は青森に残留した少数グループの一員でした。四代前の先祖、石井勝吉は実母の石井つる(旧姓・樋口)と共に斗南藩に行き、一〇歳にして斗南藩士として家督を継ぎました。

後に、石井勝吉の次男である勝世が、絶家した祖母の実家である樋口家を再興する事になります。



斗南磐梯と呼ばれた釜臥山

この曾祖父の樋口勝世は、昭和初期に木曾路の終着点である岐阜県中津川市に移住し、九十八歳で他界しましたが、私が小学生の時まで生きていたので、はっきりと覚えていきます。

樋口家の始祖は木曾路で木曾義仲に仕え、木曾家の滅亡後、子孫は信濃の武田家に仕え、またその武田家滅亡後は高縁藩で保科正之公に仕え共に会津へ、そして幕末の会津藩滅亡を体験し青森の斗南藩へ流されました。約千年に渡り様々な栄枯盛衰を体験し、樋口家の血筋は再び故郷の木曾路へと帰っていったのでしょうか。

そして今、下北半島のむつ市では、石井家の子孫の方達が、会津藩士上陸の地の側で幸せに暮らしています。斗南藩士達の苦勞がこの地で実っているように、とても嬉しく思いました。



斗南に残る石井家の方達と

偶然にも今月七月七日に放映されたNHKのファミリーヒストリーでは青森県出身の歌手・矢野顕子さんのルーツが取り上げられていました。矢野さんの母方の先祖も会津藩士であり、先祖の丸山主水は戊辰戦争後、殿様に付いて東京で謹慎、斗南藩へと移住しました。そして矢野さんのご先祖様も青森に残留した数少ない藩士の人だったのです。丸山主水は斗南藩では寺子屋を開き、子供達に会津仕込みの学問を教えました。明治になるとその博識を見込まれ地元小学校の校長に迎えられるました。そして丸山家は代々その学校

の校長を務めていくことになりました。

矢野顕子さんのご生母である鈴木淳さんは、まさに侍の娘と言いうにふさわしいしっかりした方だったそうです。自分の寿命をさとりながら、外科的な治療を一切拒否して、葬儀の会葬礼状を自分で用意したそうです。その内容を以下にご紹介させていただきます。

この度 寿命により

お別れする事となりました

幸い家族・友人・趣味に恵まれ

楽しく過ごさせていただき

感謝申し上げます

この先は宇宙の塵となり

自然の大循環の中に組み込まれ

やがて他の生命誕生に

参加する事でしょう

雪ひとひら

川面に映る

灯を取りに

御献花ありがとうございます

平成十三年二月二日

鈴木 淳

素晴らしい心境ですね。先にご紹介した会津婦道精神を伝える「なよ竹の歌」もそうですが、私もあの世に逝く時は、このように全てに感謝して、潔く宇宙に帰りたいと思いました。

く白き虎（会津白虎隊）

斗南の白狼感謝して

天駆け帰る天の川面に

北の大地・北海道へ

宮下社長のルーツ案内に戻ります。会津若松での最後の居住地は「中六日町九十九番地」です。

今から約百十三年前の、明治三十六年二月宮下社長の曾祖父・蔵田喜一郎さんはこの地から新天地の北海道に飛び立ちました。前述したとおり、その腕には、まだ一歳半の秀子さんがいました。しかし何故かその母親であるシンさんの姿は北海道にはありませんでした。

戸籍や会津藩士の人名録によると、シンさんはおそらく旧・会津藩士の大塚市松さんの長女です。という事はやはりここで宮下社長



にも会津藩士の血が流れていたのですね。もしやシンさんのお父様が北海道に行く

が北海道に行くことを反対したのでしょうか、それとも北海道で生活の基盤ができたから喜一郎さんはシンさんを迎えに来るつもりだったのでしょうか。

もはや今となっては推測するしか術はありませんが、喜一郎さんの秀子さんに対する愛情だけはその戸籍からひしひしと感じる事ができました。

喜一郎さんは、まだオムツも取れていないような娘をしつかりとその腕に抱いて、秀子さんが寒さに凍えないように暖かい布で何十にもぐるぐる巻きにして、真冬の会津からさらに寒い北海道の大地に飛び立ったのでしょうか。この子だけは絶対を守る、必ず幸せにする、と誓って。

北海道に渡った喜一郎さんは札幌

幌に移住。郊外の恵庭という場所に圃場を構え、北海道で初めての造園業「蔵田喜芳園」を札幌の地にて始め大成功を収めます。時代は下り、やがて子孫の宮下社長が平成三二（一九九〇）年、その敷地内（現在の北広島市輪厚）に「まほろば自然農園」を開拓することになります。

私は最初、宮下社長のご著書「倭詩」の中で、先祖が会津若松から来て、札幌で造園業を始めた、と書かれていたのを読んだ時、「これはきつとご先祖様は札幌の琴似に入植した会津藩士に違いない」と思いました。結果として宮下社長は検断という会津藩お抱えの商人の家系で、曾祖父様が北海道に来たのも、会津藩士達が入植した明治八年よりも二八年も後の、明治三十六年だという事が分かりました。

しかし現在「まほろば」のある場所は琴似のすぐ側であり、まほろばには、会津藩士達が心の拠り所とした琴似神社の方も通われているとの事、やはりご先祖様のお導きとしか思えないようなご縁を感じます。

現在の琴似神社には、会津藩祖

である保科正之（土津霊神）が御増祀され、境内には当時の屯田兵屋が保存されています。

この六月、家族旅行で一年ぶりに北海道を訪れ、まほろばさんにも寄らせていただきました。そして宮下社長とご一緒に初めて琴似神社を訪れ、郷土史家の永峰貴さんに神社や屯田兵屋を案内していただきました。

永峰さんは、まるでプラタモリさながら、琴似町を事細かく説明して下さいましたが、その解説のお上手な事！元教師であったと聞いて合点がきました。そして途中で分かったのですが、この永峰さんこそ琴似に入植した会津藩



右から二人目が永峰貴さん

士の末裔でありました。名刺を拜見すると校長先生まで勤められたようで、まるで矢野顕子さんのご先祖様と一緒にです。

会津藩の藩校・日新館は当時全国で最もレベルと言われるほど師弟の教育に力を入れており、食うや食わずの斗南藩時代にも真っ先に藩校を再興したほどでした。なので、今でも藩士子孫の方にお会いすると驚くほどご先祖が教職に付いている確率が高いのです。

青森でも北海道でも、流された北の地で子孫が続き、繁栄している姿を見るのは本当に嬉しいものです。一五〇年前はご先祖様が会津藩で検断をしていた宮下さん、藩士の家系だった永峰さんと私が、平成の今、会津を接点として遙か遠く札幌の町をそぞろ歩いている。こういう時にはいつも、数百年の時間が一陣の風に乗る、夢のように吹き去っていくような不思議な気持ちになります。

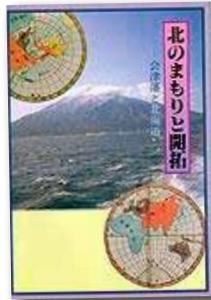
ちよつと余談になりますが、実は会津藩はもともと北海道とともにも縁があります。それは江戸時代にロシア帝国を初めとする外国

船が北海道近海に進出してきた時に、幕府の命により会津藩が北海道の海岸線を防衛する任務に就いたからです。

会津藩と縁(ゆかり)の地は北海道全域に渡り、宗谷岬にはその地で亡くなった藩士の墓所もあります。後にそこを訪れた松平勇雄福島県知事が下記の句を捧げています。

たんぼぼや

会津藩士の墓はここ



余市と会津魂

余市は北海道の南西、積丹半島の付け根にある人口二万人程の町です。宇宙飛行士・毛利衛さんの故郷であり、一昨年の朝の連続ドラマ「マッサン」では、ニッカウオースキー株式会社の創業地として登場しました。

明治四年六月この地に入植し

た会津藩士達はまず

余市川の北側を黒川村、南側を山田村と命名します。黒川村の「黒」と山田村の「田」の字は当時、



黒田清隆

開拓使の役人であった「黒田清隆」から採ったと言われています。

実は黒田清隆は薩摩人であったので、会津人にとっては憎き相手だったのですが、黒田清隆は明治政府に対して入植者の保護を訴え、小樽で行き場を無くしていた会津藩士に力を尽くしてくれた為、感謝の気持ちの表れとして村の名前に採用したのです。

そんな会津人の気質を表す言葉としてよく下記の「会津の三泣き」が引き合いに出されます。

一、移り住む人は、閉鎖的で頑固さから、よそ者扱いされて泣く。

二、しばらくすると、心の優しさと、底知れぬ人情に触れて泣く。

三、最後に、会津を去る時には、別れがつらく、離れがたくて泣く。

てしまう、そんな純朴さを持っているのです。

さて明治八年、その黒田清隆は入植者達にリンゴや梨、サクランボなどの苗木を配布しました。会津人たちは苦勞の末、ついに四年後、山田村にて日本で初めてのリンゴを結実させました(青森が一番で余市は二番目という説もあり)。そしてそのリンゴは緋衣(ひのころも、ひごろも)と命名されたのです。

この名前は、会津藩主・松平容保が幕末時に京都守護職を務めた折、孝明天皇から下賜された「緋の御衣」の赤と、会津

戦争の降伏調印式に敷かれた緋の毛氈の赤が、勤皇の心を持ちな



から逆賊の汚名を着せられた会津人の心に深く刻まれていたからといわれています。

このリンゴのエピソードは朝ドラ「マッサン（九四話）」の中でも取り上げられて、放映を見た時には驚きました。

主人公のマッサンはウイスキーの営業で北海道にやってきます。しかしウイスキーはなかなか売れず途方に暮れていたところ小樽で会津人の森野熊虎と出会い余市に連れていかれます。マッサンは余市がウイスキー造りに最適な地である事を発見し、余市にウイスキー工場を造ろうと奔走し始めます。

そして余市のリンゴ農家の主人に、自分はそれなりの覚悟をして北海道に渡ってきたので話を聞いて欲しいと頼むと、その農家の主人は、あるリンゴの木の前にマッサンを連れて行き、先祖の話を始めました。

「覚悟？　ここがこれだけの町になるのに何年かかったか、俺たちの親父がどんな苦勞をしたか知ってっか？　この木は日本で初め

て実を付けた木だ、今から三五年前の事だ。

親父たちがここに来たのはその八年前の明治四年だ、俺たちの親父は会津の侍だ。時代が明治に変わって親父達は逆賊の汚名を着せられ無理やり船に押し込められてこの北海道に流された。

親父達は刀を鎌に持ち替えて生きるか死ぬかで土地を耕して、まづ蕎麦や豆を蒔いた。だけど熊は出るキツネやウサギは出るやつと実った作物を夜中に鹿が喰つちまう。まさに自然との闘いだ。父つあまの手はいつも豆だらけ、おつかあの手は赤ぎれだらけだった。

やがて開拓使からリンゴの苗木が配られた。親父達はワラにもする気持ちで見ただけでも食った事もないリンゴの木を植え必至で育てた。四年目にやつと実が成った。何でそこまで我慢できたと思う。

それは親父達が会津の魂、武士の誇りを捨てなかつたからだ。お前にそこまでの覚悟があるか？　あんののか？！

会津だけじゃない、北海道には日本中から大勢の人が移り住み厳しい自然と向き合って自然と共に

生きてんだ。そして死にものぐるいでこの大地に根付いたんだ。だからオラたちはどんな事があってもこの土地を守っていかなくてはならないんだ。

とにかく生半可な気持ちではここではやっていけない。分かったらさつさと内地へ帰れ」

（NHKドラマ『マッサン』より）



マッサンはこの大地で生きる人達の思いに触れ、改めてその覚悟を突き付けられたのでした。

その後はご存じの通り、マッサンは会津人を初めとする現地の人達の協力のもと、余市に素晴らしいウイスキー工場を建設し、やがて余市や日本の産業に大きく貢献していきます。そして現代では本場スコットランドにも負けないくらい、世界の愛好家達も認めるほ

ど上質のウイスキーを製造するまじになっていくのです。

先日、宮下社長とお電話で話していたところ、

「実は先月余市の方で良い土地が見つかって、そこに入植する事になったのですよ。」

と聞かされました。

「ええ？　入植ですか？　そして余市ってあの余市の事ですか？」

「そうなんです。ずっとあちこち探していたのですが、なかなか良い場所がなくて、それが先月思いがけず見つかって、バタバタと決まったんです。」

「それで札幌の自宅から余市まで通って行くのですか？」

「いえいえ、家も買ったので、徐々に拠点を移していくと思えます。」

「そうでしたか……。北海道も広いのに。よりによって余市なんですわねえ」

「そうなんですよ（笑）。正確には余市町の隣町にある仁木町というところなんです。そこも余市郡なんですよ……。」

一からの開墾生活に入るとい
事にも本当に驚きました。宮下
社長と奥様は、第三の人生を会津
と深い縁のある、この余市で始め
ようとされていたのです。

まほろばのお客様なら既にお読
みになったとは思いますが、この
七月に宮下社長が書かれた「まほ
ろば創業三二周年のご挨拶・土に
帰る」を、今一度ご紹介させて下
さい。



土に帰る

大地に立つ
空を見上げれば、碧空。何も無い。
ここに立っていることの不思議。
一陣の風さえ、その答えを教えてく
れない。

だが、居ることで風になってゆく。
65歳、70歳といえ、引退、隠居の
時節。
一線を引いて、悠々自適か、道楽か、
奉仕か……余生を楽しむ。

だが、これから壮大な大地に向かっ
て霧からの出発。

本格的な農業経験のないまま、突入。
老体には、適度な運動と休息が必要
と言っ。

だが、かつてしたことのない早朝か
ら晩まで、ハードな労働に明け暮れ
る休みのない毎日。

自然は容赦なく変化し、成長し、鍛
えてくれる。

誰か、驚こうが、体が一番驚いてい
るだろう。

思い起こせば、33年前、内地から家
内と二人で帰郷した時、

「農業をやりたい！」のハズだった。
だが、何もかも無い無い尽くして、
最も身近な自然食品店からやるしか
なかった。

それが、「まほろば」の始まり。
その前提に30年以上も費やしてしま
ったのだ。

そして、今年5月。

晴れて「まほろば」の始まりに帰っ
て来れた。

その立脚点に立てたのだ。

「まほろば」がここまで育ち、
充分力も、余力も付き、どんなこと
さえも開ける気に充ちている。
普通なら、経営者なら、拡大するで
あろう。

しかし、あえて、その道を選ばなか
った。

何か違うような気がしていた。

あなたでなければ出来ないことを、や
るべき。世間は、そいつであらう。

あなたがキャベツを作らなくても、
誰でも作れるでしょう。

しかし、あなたがいなくても出来る
ことを、あえて選んだ。

誰でも作るキャベツを、作るべき日々
を過ごしている。

そして、誰にも作れないキャベツを
作るために……。

クタクタに疲れた体、風呂に入る心
地よさ、飯の旨さ、

家族との会話の安らぎ、
布団に入ると泥のように眠る。

心には、何も残らなくなった。
ポカーンとするようになった。

そのまま、あの世に行きそつな感じ
だ。人間って、こんなだったのだ。

今さらながら思っ、遅きに失した私。
何時からか、掲げた「小国寡民」。

言葉だけで、本当は分かっていたいな
ったな……。

今までは、周りは人人人、事々事、
物々物……。

でも、今は朝から晩まで、家族の顔
しかない。

ああ、これ以上少ない民は無いよナ。
小っちゃい国もない。

老子は、ここを言っていたのか。
平和って、小さなところにあるんだ
って。

何にも俺、解っちゃいなかったな
……。

本当に、これからも解るのかな……。

まほろばの店を上げるより、売り上
げを伸ばすより、

ここで、大地を一人耕している方が、
まほろばの真実なような気がする
……。

第三の人生は、原点に立ち帰り、
農業を志すことに決めました。

今は、妻と次男の三人で、人口
3000人ほどの小さな町で野菜
を作っています。

まほろば主人

余市へは私も先祖探しを始めた
翌年の、二〇〇六年秋に訪れまし



た。町の丘の上には会津藩士の共同墓地があり、高台からは余市川や黒川村、山田村を一望のもとに見渡す事ができました。会津人達が苦勞して開墾した北の大地です。



事を、恩讐を伝える為ではなく、より良い未来を作る為の後世に伝えていく術はないのだろうか等々…。様々な事を会津のルーツ探しをきっかけに真剣に考え始めるようになりました。二〇一一年に同じ福島で原発事故の悲劇が起こってからは更に……。

以上には悲惨だった
もともとは予想
会津戦争と斗南藩の歴史を知り、先祖供養の気持ちで始めたルーツ探しでしたが、もうその頃には、武士道を持ち強く誇り高く生きてご先祖様達の生き様に、逆に教えられ支えられるようになっていました。

幕末の歴史は悲劇ではあつたけれど会津魂を貫いたご先祖様達はきっともう誇り高く潔く成仏しているはず。それならば本当の先祖供養ってなんだろう、そもそもどうしてこんな悲劇が歴史には数多く存在しているのか、また二度とこんな悲劇を繰り返さない道というものはこの世にはないのだろうか。そしてこういう歴史があつた

問題があまりに大きすぎて、一人の人間ができる事はあまりにも小さく、無力感に苛まれる時も多くあります。

でもこの夏は、都心からは見えない天の川を何度も何度も心の中で仰ぎながら、再び自分に問いかけ続けました。そして宮下社長の「土に帰る」を読ませていただきました。

クタクタに疲れた体、風呂に入る心地よさ、飯の旨さ、家族との会話の安らぎ、布団に入ると泥のように眠る。心には、何も残らなくなつた。ポカーンとするようになった。

そのまま、あの世に行きそつな感じだ。人間つて、こんなたつたのだ。そう、もし私が心から満ち足りてこんな人生を歩めたらなら、それが何よりの先祖供養であり、世界をより良くするピースとなれるのでは……。

命を与えてくれた大地と先祖に感謝して、昼は紺碧の空の下で大地を耕し一家の食べる分のお米や野菜を作る。夕方は小さくても我が家に通じる確かな道を辿り、美味しい食事を食べ温かな湯に浸かる。そして夜は天の川が見える満天の星空を仰ぎながら眠りにつく。

家族の理解や協力も必要な事なので、実現できるのか、またいつの日になるかは分かりませんが。この夏は宮下社長の第三の人生に、一つの道標と未来への可能性を与えていただきました。

まだまだ探訪の旅は続いています。もしかして本当に解る日は来ないのかもしれない。それでも、迷いながら摸索しながら、笑いながら泣きながら…、大地に足を付け星



空を見上げ、宇宙に帰るその日まで歩き続けたいと思います。

最後までお読み下さいましてありがとうございました。

今回は宮下社長の尊崇するご先祖さまの一人、会津藩教学の祖・横田三友俊益の人生を中心に、会津の町並みと歴史をご紹介します。

それでは残暑厳しき折、どうぞ皆様くれぐれもご自愛くださいませ。

〜いつの日か
天駆け帰る天の川
笑みも涙も

星のまたたき

二〇一六年八月八日

大橋しのぶ

熊本地震

鬼官兵衛記念館・興梠館長からの 続報 & 義援金寄付情報



明治10年3月18日黒川高野原台地
に於て1撃打ちの最中後方から砲撃さ
れ倒れた佐川官兵衛討死の地碑



阿蘇南郷恵比須屋跡に建つ豊後口
警視隊1番隊指揮長1等大警部
佐川官兵衛本陣跡碑



熊本県南阿蘇村黒川高野原台地において
壮烈な戦死を遂げた佐川官兵衛の首塚



無
惨
に
崩
落
し
た
高
野
原
の
地
に
建
つ
討
死
の
地
碑
16. 4

※先月、鬼官兵衛記念館・興梠館長から追伸のお手紙をいただきました。元読売新聞記者の田川さんという方が危険を冒し、徒歩で現地の様子を見て来てくれたそうです。佐川官兵衛の顕彰碑は左下の写真のとおり、地震で粉々に破損していたそうです。

もしも、特に「南阿蘇村」へ義援金を寄付したという方がいらっしゃいましたら、佐川官兵衛顕彰会事務局や会津武家屋敷でも義援金の募集をしておりますので、どうぞよろしくお願いたします。下記に会津武家屋敷HPからの情報を転載いたします。

平成28年熊本地震の被災地「南阿蘇村」への 義援金のお願い

去る4月14日以降に発生した地震により、熊本県の多くの自治体で災害が発生し、その被害は甚大となっており、未だに地震が収束する状況には至っておりません。まずは、被災された皆様にお見舞い申し上げますとともに、一日も早い復興がされますことを心よりお祈り申し上げます。

旧会津藩家老・佐川官兵衛の終焉の地である南阿蘇村でも今回の地震により被災し、多くの村民の方々が不自由な生活を強いられ、復旧もままならない状況となっております。南阿蘇村は佐川官兵衛が明治十年の西南戦争の際に新政府の警視隊副指揮長として熊本県下に出征し、軍事的要衝・旧白水村に本陣をおき、数日の滞在後に進軍、旧長陽村黒川に於いて薩摩軍と遭遇し、その銃弾に仆れた場所です。

南阿蘇村では、生前の官兵衛が部下の規律を徹底し、村人にも親しくに接したため、人々から慕われ、彼の死後、官兵衛を偲ぶための石碑が村人たちの手によって村内に多く建てられ、現在でも彼の治績が顕彰され、語り継がれております。

また平成十三年には官兵衛が討死した場所の阿蘇の石の寄贈を受けて、会津で初めてとなる佐川官兵衛の顕彰碑が建立され、以来、会津若松市と南阿蘇村は官兵衛が取りなす自治体として官民ともに交流を続けてきました。

この度、佐川官兵衛顕彰会は、この縁ある南阿蘇村において被災された方々の支援と、地域の早期復旧の一助となればとの目的で義援金を募集することといたしました。何卒、被災地・南阿蘇村の状況をご賢察の上、皆様の温かいご協力を頂きたくお願い申し上げます。

平成28年5月 佐川官兵衛顕彰会会長 菅家一郎

尚、義援金は直接、佐川官兵衛顕彰会事務局 会津武家屋敷にお持ちになるか下記口座までお振込み下さい。 東邦銀行 会津若松市役所支店

普通 104045 佐川官兵衛顕彰会 事務局長 岩淵忠清

義援金追加情報（佐川官兵衛顕彰碑 再建基金）

もしも特に「佐川官兵衛顕彰碑の再建」の為に寄附を寄せて下さる方は、下記の口座をお願い致します。こちらの方にご寄附いただいた場合は、お名前が礎石の台座に刻銘されるそうです。締切は11月末日で、来年の4月の再建に向け準備中との事です。

ゆうちょ銀行 記号 01720-9

口座番号 167637

加入者名 熊本 佐川官兵衛顕彰会

●著者プロフィール 大橋 しのぶ

寺田他家 23 代目当主故・寺田啓佐さんとの出会いにより、蔵の微生物をテーマにした小説を書き、小冊子を発行することに。ペンネームで発表した小冊子作品は 5 作になる。2015 年、まほろば社長宮下周平と共にルーツ探しの旅の案内人として同行。神奈川県在住。